

日本労働年鑑 第27集 1955年版
The Labour Year Book of Japan 1955

第一部 労働者状態

第五編 労働者の生活

第二章 栄養

第一節 労働者の食事

全日本造船労働組合の調査(一九五三年九月)によると、労働者の主食不足の補給状況は第223表のとおりで、約半数の者は闇米を買えず、麦やうどんで補充せざるを得ない。又、肉などは一月に三日以内、一回一〇〇匁、それもコマ切れが多いといった状態である(第225表)。魚は一月一〇回程度が一番多い(第226表)。そして第224表の通り、魚も肉もなしに一〇日間も暮している労働者が全体の三分の一を占め、二〇日以上というのが工員一五三人、職員二七人もいる。「とくに工員の場合、一切の他のものを犠牲にして栄養をとろうと努力していて、なお三分の一の人が一〇日以上、肉も魚もないというのは恐ろしい現実」であるがこの報告書は述べているが、かかる状態は決して例外的のものではない。全日本生命保険従業員組合による家族寮に住む世帯の調査(五三年一月)では「米の配給は一〇日前後であって問題にならないほど不足である。晚めしだけは米飯にして、朝と昼とは大抵パンかうどんである。肉類などはコマ切れを三日に一度買う位いでだし程度に過ぎない。食料品の値上りのため、その分だけ食物の質を落していくため、生活はますます生きて行くだけという最低線に近づいて行く傾向がある」という食生活状態が報告されている。

寄宿舍の食事

一九五三年九月、全国蚕糸労働組合連合会婦人対策部が熊本県下の六工場について行った調査によると、食事内容の比較的良好な工場もごく稀にはあるが、これも女工の要求の結果であり大部分は「健康を保ち、労働力を作るべき食事としては、全くお粗末すぎるの一語につきる」状態である。すななわち食事に対する意見は第227表の通りであるが、これによると寄宿舍の食事内容は次のような状態である。(1) 食べるのこす者が相当いる。これは炊き方がまずかったり、副食が足りなかったり、毎日同じ副食ばかりで飽きるためである。このため腹がすいて水を呑むので胃腸病が多いと報告されている。同じく九州の一工場における調査によれば六〇人中五〇人の者が副食を各自で購入(月額平均二〇〇円、最高五〇〇円)して補給している。(2) 食事の量が充分でなく買い食いする者がほとんどである。食事を食べ残した者も当然こうして補う。(3) 副食は大抵野菜が主体であり、野菜が古くて脚気が多いという声もある。魚は週一〜二回、肉は「何時食べたか忘れた頃」に食べる状態である。その上、料理の種類は一〇年一日の如く単調極まりない。なお同じ九州の一工場の調査によると、一カ月間(八四食)の食品内容は第228表の通りで、野菜が大部分で油、魚、肉、貝類などは非常に少い。大抵朝は麦の混った飯にきゃべつのみそ汁だけ、昼は「社長と会食するので少々よい」が、それも豆腐と野菜の煮付一品だけ、晩はやはり野菜を主とした煮付やうどんなどの代用食で、野菜のひたしだけというのが三日もある。

なお最後に、厚生省公衆衛生局の「国民栄養調査」を掲げておく(第229表)。

日本労働年鑑 第27集 1955年版

発行 1954年11月5日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2001年10月16日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1955年版(第27集)【目次】 次のページ→ ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
